A. hupehensis として取扱はれ，この名は其後多くの園藝書に出て居るが植物學上の出版は Boynton が 1931 年 Addisonia に圖解したのに初まる。*A. hupehensis* は *A. tomentosa* に似て居るが葉下面は白綿毛を密布する事なく，花粉は最初に輸入されたと思はれる植物に就て 95%完全であつた。このものは中部西部支那（湖北・湖南・四川・貴州・廣西・雲南）に自生して居る植物と一致し，多分北部ルソン・臺灣にも産する。*A. tomentosa* は栽培すると時に高さ 5 呎に達し，*A. hupehensis* より花色淡く數週間早く開花する。シウメイギクは *A. hupehensis* と花被の數と形を除き全く一致し，後者の半八重品に過ぎないと考へ，*A. hupehensis* var. *japonica* (Thunb.) Bowles et Stearn として區別する。Hylander は *A. hupehensis* の花粉が不完全であるとして居るが自分等が栽培して居るものの花粉は 84～95% 完全であり，この事は一重咲の *A. hupehensis* が支那に廣く分布して居る種であり，シウメイギクはそれから導かれた異常形である事を證明する。シウメイギクは日本に見出される唯一の形であつてこれは輸入され歸化したものと思はれ，支那各地でも見られ雲南の奥地では古くから墓地附近に植えられたものであらう。次に歐洲に於けるシウメイギク及び近似品の栽培の歴史に就て多くの文献を引用して詳述して居る。*A. vitifolia* はヒマラヤ・ビルマ北部・雲南に生じ，1829 年に歐洲へ輸入された。Gordon は 1847 年既にこの種とシウメイギクの雜種を作つて居た。其後出來た多くの園藝品種は雜種起源である事は明かで，*A. elegans* の名でこれをまとめる。この類では花粉は不完全なものが多く完全な花粉は僅か 0～30% で莖は高さ 1.5m に達する。尙シウメイギクの花粉は 67～100% 完全で，雲南の栽培品では 100% 完全，日本東京のものでは 67% 完全であつた。終にこの類の簡單な檢索表があげてあるが，その特徴は上述した通りである。

昨年度には更に大物として Babcock 博士の 'The genus *Crepis*' Part I & II in Univ. Calif. Publ. Bot. **21**: 1～198, pl. 1, fig 1～11, t. 1～12; **22**: 199～1030, pl. 12～305, t. 13～19 及び Copeland 博士の 'Genera Filicum' 272p., 10 t. in Annales Cryptog. et Phytopatholog. Vol. 5 が出版されたが，これ等に就ては項を改めて紹介する。園藝的のものでは Van Melle 氏の 'Review of *Juniperus chinensis* et al.' 108p., 12 t. があり，これに對する批判も出て居る。

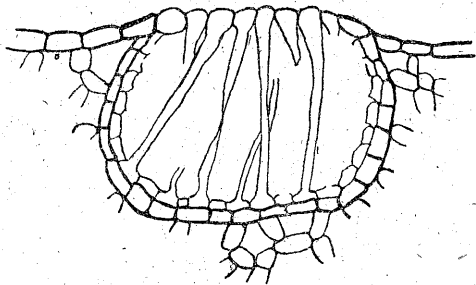
○ヒメボツス（原　寛）

Samolus 屬のものは通常我國にヒメボツス (*S. Valerandi* L. var. *typicus* Knuth) とハヒハマボツス (var. *floribundus* Knuth) と二品が産する事になつて居るがこれは疑しい。ハヒハマボツスの方は，1886 年 Maximowicz が *S. floribundus* と同定し，我國では上記の樣に變種としての學名がよく用ひられて居る。松村博士は明治 23 年に *S. Valerandi* の學名で報告されたが，これは種を廣義に扱ひ *S. floribundus* をも含めた意味で用ひられたので，內容はハヒハマボツスを指して居る。又 Knuth (1905) も *S. Valerandi* の下に日本産標本を引用して居るがこれも同樣の意味で，var. *floribundus*

の產地に日本を擧げて居る點からもハヒハマボッスである。ヒメボッス var. *typicus* Knuth が我國に產するとした最初の記錄は，恐らく三好，牧野兩博士の日本高山植物圖譜 2: 80, fig. 229 (明治 41 年, 1908) で，產地は「中部北部草本帶 (信州)」と記されて居る。併し私は邦產の標本中で確かに var. *typicus* に屬するものに接した事がない。東京科學博物館で var. *typicus* に當てられて居る陸奧百澤其他の標本も何れも誤で，皆ハヒハマボッスである。

狹義の *S. Valerandi* L. 即ち var. *typicus* では莖は直立し，花梗は通常長さ 5~12 mm で斜上し途中小苞の附着點で少しく膝曲更に上向し，小苞は披針形，花は大きく萠も大形で長さ 3~4 mm ある。歐洲，西アジア，アフリカ，濠洲にあり，ヒマラヤ，中華民國東南部に迄分布し，オホツクに產すると云ふのは疑はしい。ハヒハマボッスはこれより瘠長で，莖上部は枝を分つて往々擴散し，疎な總狀花序を着け，花梗は一層細く通常開出し眞直で長さ 8~18 mm，小苞は狹小で，花は約半分大，萠も小さく長さ 2~3 mm である。北海道 (石狩以西)，本州 (近江，隱岐以東) の多くは瀕海の濕地に生じ，南北米大陸，西印度諸島に廣く分布して居る。最近は *S. Valerandi* とは別種として取扱はれるのが普通で，米國では **S. parviflorus** Rafinesque (1818) の學名が用ひられ，この方が *S. floribundus* Humboldt, Bonpland et Kunth より 1 ケ月前に出版されたと云ふ事である。

○破古紙補遺 (久內淸孝)

戰災區域で，破古紙即ちオランダビユを見付けて，其腺 (Zwischenwand drüse) の形態學的特異性から之を同定した上，(この腺の圖は猪野俊平氏の植物の組織に出て居るが名稱が與えられてないから) 小倉謙氏に依賴して間膜腺なる譯語の制定を需め，之を採集と飼育に投稿してをいた。其後週然雜誌本草を再讀していた折，其第二十三號(昭和 9 年 8 月發行) 48頁に牧野先生が「むかし破古紙といへる藥種をしらずしてふる反古を用ひたる人のわらへる事なるが」ナル雨森芳洲の「たはれぐさ」を引用し，かつ，草木圖說の圖を轉載されていたのに氣付いた，依て本邦に於ける，破古紙文獻の一を看過したる罪を謝することにする。私は現在の植物學者でこの生本を熟知されて居るのは，先生丈ではあるまいかと信じて居た折柄，まことに貴重な文獻を發見したのをよろこぶ。其後更に次の文獻を見たので，それをもつけ加えてをく Em. Perrot & Paul Hurrie: Matière Médicale et Pharmacopée Sino-Annamites (1907) p. 150. この書に

オランダビユの間膜腺縱斷略圖(原圖)